
魔力ゼロのチート勇者。

SYO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔力ゼロのチート勇者。

【Nコード】

N2024Y

【作者名】

SYO

【あらすじ】

不運な事故死で、一度人生をログアウトした少年坂町 さかまち 揚羽 あげは が、事故から庇った少女こそは人間の状態は仮の姿で、ホントは神様であり、その神様ことルルが謝礼を込めての異世界転生というライトノベルのよくあるジャンルを引っさげて異世界を冒険するといったことを綴る物語。

——とまあ出だしはよかったものの、ルルの手違いでまさかの魔力ゼロに！！ さて、魔力がなくなったことにより若干の不安が身に

寄る……。

ログイン・「プロログ的な話」

今から綴られるこの物語は、俺こと坂町さかまち 揚羽あげはが突然不運な事故死によって齡17にして人生からのログアウトをした所から始まる。

さて、今の状況を3単語でまとめてみよう。

天地が

真っ黒で

ヤバイ。

お分かりいただけただろうか？

そう。人は死んだら『ドラゴンボーズ』と呼ばれる少年マンガと同じように魂が赤、青の鬼達によって一列に指導されて閻魔様が天国と地獄を決めているわけではないのである。

先程まとめたように、『無』と言うに等しい景色の中でフワフワと浮いているだけだったのだ。

限りなく暇。

それもそう。

ただ浮いているだけなので。

浮いているだけだったのだ。

非常に必要なので3回言いました。

あ、暇ついでに俺の死因について話しておこう。

――事故死。

飛び出し注意！ と描かれたポスターを想像してくれたり、はたま

た『幽霊ハクション』と呼ばれる、仕事をしないとあるゲーマー漫画家が描いたマンガの主人公を想像してくれば正解かな。

最も俺の場合は、相手側が運転マナーのご法度であるケータイ片手に『電話しながら運転』をしていたため、信号に気づかず歩道を渡る小学生（女の子）を跳ねようとする状況だったので、必死に走ってその子を庇った結果がこれである。

つまり何が言いたいかと言うと、

運転マナーは守りましょう。

ホントにこれは守ってほしい。

今回のような状況に、もし読んでる貴方達が実際になったとしたら？考えるだけで恐ろしいでしょう。

とまあ、俺の死因についてはもう終わったことなのでいいとして、轢かれそうになったあの子……俺の意識が消える前に何か言ってたような……。なんだっけ？

すると真っ黒で固められてたこの世界に、突如神々しさをも表す一筋の光が射し込んで、やがてはそれが世界に広がった所に人らしきモノが見えるようになる。

「やっほー」

「君は……」

それは先程俺が助けた女の子であった。

「ようこそ虚無の世界へ。居心地はどうかかな？」

「胸に雲がかかったかのようなモヤモヤ」

素直な感想を持ってきた。

「中々詩人なのは良いとして、どう？ 改めて自分が死んだことに対しては？」

「小学生の女の子が饒舌に世界を語ってくるのに驚愕したのと、あー俺死んだのかーという感情かな」

人は脆いとはメディアを通じて一応脳の隅っこにはしまってたけど、実際に死んでみて三途の川とか彼岸花とかも何も無くてビツクリ。まさに無だもの。

そこで俺はテンプレとも言われるセリフを彼女に放つ。

「君は一体何者なの？」

「神」

啞然。

「それがホントだったら俺は今、神様と対峙してるという宗教徒の願望を成就させた奇跡の人間1号となるわけだけど？」

「そんなことないよ。私にあったことのある人間なんて結構いるよ」

これまた啞然に続いて呆然。

どうやら言ってることはマジでらしい。

「それとね、私は貴方に――」

「揚羽。坂町 揚羽」

神様である彼女の言葉を遮り自己紹介。

「アゲハね。私はルル」

「ルルね。よろしく」

彼女ールルも折り返し自己紹介をする。

「それでね、アゲハに言うことが1つあるの」

「もしかとは思うけど、自分のせいで一般ピーポーの俺の人生がログアウトしたことに責任を感じて、転生させてくれるわけだー異世界に」

「すごーい！」

なんて物分りの早い少年なの！ ってルルが思ってくれたら嬉しい。

「そうだよアゲハ。いわゆるライトなノベルにありがちな異世界転生というジャンルを引っさげて、新たな人生にログインするんだよ！」

まさに王道。

俺が死ぬ日の前夜、そんな感じの小説を読んでいたもんだ。

「じゃ、転生しようか」

「ちよい止まれ！！」

あまりに早すぎた出来事に声を上げる俺。

まあ、物分りが俺の倍の倍の倍はあるみなさまならもうお気づきでしょう！

「なに？」

「お前……まずは異世界の特徴については教えてくれよ」

「あ、そうね。いうならばファンタジー。魔法やら精霊やらを想像できるライトノベルに多いであろうジャンルの世界よ」

「王道中の王道の世界設定じゃないの。てか、俺は転生する人間というこれこそライトノベルの異世界転生主人公における特権といって、それに合う能力というのが欲しいのですが」

「えーっと、つまりは人気ファンタジーゲームの『竜クエ』や『F
ファンタジー
フラクタル・
F』のような能力が望みと？」

「うん。王道にライトノベルというチートにチートを重ねた作者のご都合主義的主人公で頼みたいんだけど」

「オッケー、じゃあそろそろ異世界に転生するよ」

ルルが手をかざすと、俺の意識が徐々に消えはじめた……。新たな人生の幕開けだ……。

最後に冒頭で言ったことをもう1度。

これは、不運な事故死により一度人生をログアウトした少年である

坂町 揚羽こと俺が、ライトノベルのよくあるジャンル異世界チート物を引っさげてここに綴った物語である。

1. 「アゲハ5歳」

こんにちは。

不運な事故死により異世界転生をした俺こと坂町 揚羽です。

この世界に転生してからおよそ5年近く経ちました。

つまりは幼稚園年中の年齢というわけ。

しかし自分が1度死んで、この世界に転生をしたという事実はこの年になるまでは気がつかなかった。

1歳また1歳と年齢が増えていく度に、前の世界での自分の過去が映像として流れてきて、徐々に人格が過去のものと今のものと融合する。

5年経った今では前の世界の記憶を6割思い出し、幼稚園児ながらも1人称は俺というなんとまあひねくれたガキが構成されたわけですよ。

と、記憶が戻った所で俺をこの世界に転生させた神様——ルルの言ったことを思い出し、この世界のことを自主的に調べ始める。

別に5歳児らしく「ねーねーおかあさん」と愛くるしい態度でもよかったが、俺の自己分析した性格上では、他人に聞くより自分で調べると頭に入りやすいといういかにもデイス・コミュニケーションの鑑のような性格だったため、こうして家の中にある書庫から地道に調べるのであった。

その中で色々なことがわかった。

この世界の名前は『セルビス』と言って、ゲームやらライトノベルのファンタジーと全くの同じようなタイプで「精霊」と「妖精」と「人間」と「魔物」が共存する剣と魔法の世界だった。

世界は4つの大国が世界を総ており、順番に

火の国『ファイアラン』
水の国『アクアリウム』
風の国『ウィンドル』
地の国『ノームホレマ』

とまあ、いかにもって感じの世界観であつたが逆に嬉しかった。

――この世は腐っている。

なんて『死のノート』というマンガにあつたセリフを引用して前の世界での日常を振り返る。

平日はつまらない授業を受けに行き、休日では『お前ら』と呼ばれし人種の掲示板サイトをチラッと覗いて終了。

友達から遊びの誘いもあったけど、楽しいと感じる時間は極小。

――でも、今は違う。

現実では無かつたことがここではできる。

俄然胸の奥から、この世界に対する高揚感が上がってくる。

パタン。

この世界について綴られてる本を閉じる。

完全に前とは違う自分。

これから始まる新しい自分。

そんな人生はどうやってこれから進んで行くのだろう。

――そう思うと胸が躍るのは、それはきつと前向きに事が進む前兆

だと俺は思う。

さて、これ以上は何か悟りが開いてしまうような気がしてならないと俺は感じた。

悟りと言えば、かつて俺が『竜クエ3 〽その後伝説へ……』というゲームをプレイした時に作中で手に入れた『悟りの書』というものがあつたのを思い出した。

たしかそれを使うと魔法を使う職業では最強になる『賢者』という職業になる。

その他にも『遊び人』というクソニート同然の職業もあつたなあ。

確か唯一『悟りの書』無しで『賢者』になれる職業。

それを初めて知った時は、『遊び人』の事をまるでゴミカスを見るような視線でプレイしていてホントにごめんねって涙を零したのもまた懐かしい……。

それに涙を零したといえはもう1つ。

いや、この場合は零してはいないが何か儂いものを感じたと記憶はある。

フラクタル・ファンタジー
『FF11』

基本は1人でプレイする『FF』のシリーズ初オンライン体制となつたゲームだ。

オンラインといえば、素性も知らない相手との協力プレイが可能で、それをきっかけに仲良くなったり、現実で実際に会ってそのゲームについて語ったりすることもできる。

確かオフ会ってやつだ。

で、話が逸れたが俺がこれに涙した理由は『FF11』発売のCM。

『また弟くん1人でゲームしてるー』

というかわいい姉の発言に対して、

『……1人じゃねえよ』

そして無愛想な弟くんのプレイするゲームの画面右下のチャットと呼ばれる会話欄のところに、

『頼りにしてるよ、俺たち仲間じゃん』

『……へへっ』

あまりの切なさに全俺が泣いた。

こういうデイス・コミュニケーションの手本となる物が社会にN^要_{不適職者}e dされないNetを生むんですよ。

あ。

そうだ。

ゲームで思い出したんだけど、今1つ大切なものを忘れてた。

――魔法。

確か俺は5年前……あくまでこの時間軸での5年前だが、ライトノベルの主人公にありがちなチートにチートを重ねた能力を欲しいってルルに言っただけど、どうなんだろう？ 今普通に、例えば無難にファイアーボール【火の玉】とか口ずさんでみたら実際に使えるのだろうか？

よし、試してみよう。

「アゲハ〜ご飯だよ〜」

ディナーの後で。

???

転生先のお母さんの料理をたらふくたいらげて、外へと出る。

時刻は17時。前の世界より文明の発達はかなり遅れてるが時計だけは造られてた。

誰もいない家の裏。

そこで俺は左手足を前に出す構えを取って、息を吸い込む。

とりあえず……試しに『テイルス』シリーズに登場する魔法のイメージをする。

小さい火の玉が手に現れ、それを放つイメージ。

伊達にライトノベルやらゲームをやってないので、魔法に対するイ

メージは得意である。

デイベイディング・セイバー

そのうち【断罪の光】とか使えたりして……。

おおっと、まずは試しにやるのが最優先。

再び息を整え、目を瞑る。

右手にじわりと温もりが溜まっていくのがわかる。

その暖かさを燃え盛る火に変え、玉にするっ！

そして、一気に放つッ！！

「ファイアーボール【火の玉】！！！！」

手に溜まった火の玉は勢いよく放たれ、地面は燃えるッ！！――…ハズだった。

「――あれ？」

おかしい。

確かに俺はこうしてこの世界に転生した。

だったら魔力もチート級になってるハズ。

「考えても仕方ない……もう1回！」

???

「はぁ……はぁ……」

かれこれ1時間くらい【火の玉】ファイアーボールを唱えたが……

――結果は何も出ず。

「なんだよちくしょう……どうなってるんだ……？」

そんな事を漏らしながら、1つの答えに辿りつく。

ルルのやつ、もしかしてチート能力を付けるの忘れてた？

……。

……。

……。

「アゲハ〜！　いつまで遊んでるの！　早くお家に入りなさい！」

「……はい」

悲愴感を引っさげた返事をお母さんに返して家へと帰っていく俺であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2024y/>

魔力ゼロのチート勇者。

2011年11月18日04時09分発行